

修学旅行前に学ぶ

ひめゆりと戦争

ひめゆりの歴史

明治期に設立され、沖縄師範学校女子部と、沖縄県立第一高等学校はひめゆりの愛称で親しまれました。

一九四一年ごろから戦争の影響が強くなり、ひめゆりの生徒たちは戦争への道を歩むことになりました。そして、

学校の授業も次第になくなり、十一月からは陸軍病院動員に備えて、看護訓練が始まりました。



ひめゆりの花（オレンジ色の花）

女学生

女学生たちは、「お国のため」に兵隊の見送りや、神社への戦勝祈願、慰問袋の製作が当然の事と考えられていました。

学校

制服は、セーラー服、へちま襟、標準服があります。

そして、敷地は八千坪もあり、体育館や行動などがありました。

髪型は、

一年生は、おかつぱ

二年生は、前髪わけ

三年生は、二つに分けたおさげ

四年生は、三つ編み

師範本科一、二年生は、ロール巻きと学年ごとに統一されてきました。

戦場での学用品

・筆箱・万年筆・下敷き・くし・歯ブラシ・手鏡

などの身の回りの物を持っていましたが、ほとんど使うことはありませんでした。また、歯を磨くことも顔を洗うこともできない日々が続きました。

負傷者の実態

発狂してしまった人、手足を失ってしまった人、顎が外れて食べ物を食べられなくなってしまった人などの重傷者がたくさん出ました。

また、壊死した部分には蛆虫がわき、衛生的に良くない環境でした。

重症患者は、壕内に残され「あとからトラックで運ぶ」ということが伝えられました。しかし、実際には、毒薬の青酸カリの入ったミルクを配られ、それを飲んで苦しむうめき声や「お前達それまで人間か」という叫び声を聞いた学徒もいました。

命の尊さ

戦争がはじまると命の尊さがなくなり、兵隊はもろろん戦場にいる人間は皆、「数」でしかなくなりました。

しかも、戦うこと出来ない重症の兵士たちは、意味もなく殺されていきました。

現代の平和な日本ではとても考えられませんが、どれもほんの七十年ほどまえに実際に起こった出来事です。そして、生き残った人たちは「証言員」として次世代に語り継いでいくのです。

感想

戦争のつらさと悲しみが痛いほどよくわかりました。今まで知らなかった沖縄での戦争は想像以上に壮絶で自分達は絶対に戦争が起きない世界をつくらなければならぬと思いました。

ひめゆりの資料館に行って、わたしたちは沖縄の戦いで起きた悲惨な事実を知りました。正直に言って、こんなつらいことは知りたくないとも思いました。生き残った人々にとっても、むしろ思い出したくない事実だと思えます。

でも、あえてその事実を正面から見つめて、すべての人々が二度とこんな思いを、こんな体験を、することのないような世界つくろうと努力することが、亡くなった方々や、生き残った方々に応える唯一の道ではないかと思えました。

